

「われに従え」

ルカ9：18-27

(1)

9章23節から24節の御言は、弟子たちだけに語られたのでしようか、<sup>1</sup>いつもさうではなく、そばに居合わせた群衆にも語られた御言のようです。つまり、特定のものたちに語られたのではなく、主イエスが「飼う者のない羊のように弱り果て、倒れている群衆」と御覧になっていた群衆にも語られた御言なのです。

主イエスは、「だれでもわたしについて来たいと思うなら・・・」と言われましたが、あらためて読み直しますと、<sup>2</sup>どうも、あなたにその気があるなら、<sup>3</sup>といわれているようです。、<sup>4</sup>はらに言えば、<sup>5</sup>従う・従わないはあなたの自由です。もし、<sup>6</sup>従うことが不本意ならば従わなくてもよろしいといわなければなりません。自分捨て、<sup>7</sup>自分の十字架を負って従え」と言われたお方が、<sup>8</sup>ママイによる福音書11章28節では、「わたしのくびきは負います、<sup>9</sup>わたしの荷は軽いからである」とも言われたお方です。

ただ、<sup>10</sup>くびきしただけでなく、<sup>11</sup>ただ、<sup>12</sup>くびきしただけでもありません、<sup>13</sup>こ

うまで厳しさを求めておられるお方は、同時にどこまでも優しいお方です。

ところで、この御言には、語られた背景があります。ルカ9章18節以下をもう一度見直しますと、主イエスが、「群衆はわたしをだれと言っているか」と問われた後、弟子たちに向かい「それではあなたがたは、わたしをだれと言うか」と問われたのです。

問われた場所は、ローマの皇帝・カイザルが統治していた「ピリポ・カイザリア」という町、問われた時期は、主イエスの公生涯のほぼ真ん中です。

主イエスから「わたしをだれと言うか」と弟子たちに問われた時、一番弟子のシモン・ペテロは、「あなたこそ神のキリストです」(20)と答えました。すぐ後の9章44節には、「人の子は人々の手に渡されようとしている」とありますから、主イエスが十字架を前にして語られた御言<sup>1</sup>、それが今朝、みなさんと目にとめているルカ9章23節・24節の御言です。

先ほども申しましたが、「だれでもわたしに』ついて来たいと思うなら・』と主イエスは言われました。

ムリヤリ従わせる気はありません。  
むしろ自発的に喜んで主イエスに  
従うことを願うなら自分を捨て、  
自分の十字架を負って、われに従  
えと言われました。

(2) キリストについていくため  
に

第一は「自分を捨て」です。

「自分を捨てる」の反対は、「自分  
を大切にする」ことですが、

24節に「自分のいのちを」救おう  
と思う者』は……」に続き、「自  
分のいのちを」失う者』は……」  
とありますから、このでの関心は、  
「自分のいのち」についてです。

沖縄・読谷村の日航ホテルの広場  
で、イギリス人が「バルーン」を拵  
げていました。妻と二人で興味深  
くながめていましたら、「乗ります  
か」と誘われ、バルーンに乗り合  
せる機会がありました。

「気球」は上昇する時、かこの周り  
の「重石」ー、「バラスト」を取り  
外します。すると気球はフワリと  
浮上しはじめます。

わたしたちの地上の生活に安定を  
あたえているー、いえ、地上の重石  
（おもし）になっていくものー、そ  
うした「バラスト」を捨てて、「わ  
れに従え」と言われます。しかし、

いくらなんでも「自分を捨てて」と  
言われてハイとはなりません。

しかし、「わが身を捨ててこそ、浮  
かぶ瀬もある」とも言われている  
ではありませんか。わたしたちが、  
いくら必死になって、自分の命を  
守ろうとしても、予期しないとき、  
そのすべてを奪い取るような事態  
が向こうからやって来ることもあ  
ります。

10年前の三月十一日、マグニチ  
ュード7という巨大地震が発生し  
ました。三陸沖に、押し寄せた波・  
引く波が、妻・子・父母、兄弟、さ  
らには土地・家屋まで、すべてを洗  
いざらい奪い取りました。犠牲者  
二万といえます。

三陸沖は、江戸時代から、いえ、そ  
れよりはるか以前から、何度も津  
波に襲われています。先祖代々か  
ら伝えられてきた教訓は、津波に  
襲われたら、親兄弟を考ええるな、家  
に戻るな、後ろを振り向くな、自分  
のことだけを考えろ、山に逃げよ、  
「自分の命」だけを考えろー、これ  
が先祖からの言い伝えです。

さらに、自然災害だけでなく、思い  
がけない時、愛するものとの死別  
があります。

防府の役所を退職して、ヤレヤレ

と思っていた時、「急性白血病」と診断された方がおられました。発病してから、二年で亡くなるといわれている病です。まよなか・・・とは思いましたが、やはり二年で亡くなられました。この方は、ご自分の命と真剣に向かい合った二年間を過ごされました。入院してから一年後の夏、彼は入院先のベットで洗礼を願い出られました。そうした願いには背後に奥さんの祈りがありました。

詩篇49編18節、「ひとは、死ぬとき、何ひとつ携えて行くことが出来ない」―何と厳粛な御言でしょうか。そうと気づいた彼は、地上の「バラスト」を放しはじめ、御国を指して浮上する用意をしました。

親しい仲間や親兄弟に囲まれていれば安心がもしれません、しかし、いつまでも、頼りになるわけはありません。

主イエスは、「だれでも父、母、妻、子、兄弟、姉妹を捨てて、わたしのもとに来るのではありません、わたしの弟子になることはできません。」と言われましたが、誰でもそれは無理ですと言わざるを得ません。

しかし、それゆえに「無理と

言えることは、「自分を捨てて」です。これはもつ無理を超えて、不可能といわざるを得ません。それは、平たい板の上に乗った自分を、自分の手で持ち上げようとするようなものです。

「自分を捨て」の箇所を英語聖書の訳を見ました。「DENY HIMSELF」。「FORGET HIMSELF」、モファット訳は「自分のもてるあらゆる権利を断念すること」とありました。

「自分自身を否定する」・「自分自身を忘れる」ことなどできるはずがありません。まして、「あらゆる権利を断念する」となれば完全にアウトです。起きてから、寝るまで、いつも自分のことにとらわれている「わたし」があります。

神戸の有馬温泉で、「カルバン学会」が開催された時、講師は関西学院の教授「山中良知先生」でしたが、先生と一緒に風呂に入る機会がありました。山中先生は、シベリア抑留を経験した方です。悪辣な環境と強制労働とが原因で、約6万の人が亡くなったといわれています。馬糞まで口にしたいくなる、ひどい経験をしたといえます。今でも、思わとず、隣に座った人の皿にジロツ

と目が行くそりです。「浅まっいですな・・・」と述懐しておられました。「自分を捨てる」などということができるはずもないのです。まして、「自己」死ぬ「など」ということになれば無理・不可能です。

山口市の仁保村に、無名の「嘉村磯多」という作家がいます。「私は都会で死にたくない。異郷の土に、この骨を埋めてはならない」と墓碑に記しました。わたしは、都会育ちですが、「都会のごみになりたくない」という思いはわたしにもありました。

「人生いたるところに青山あり」と言われてきました。「青山」とは、「死に場所」なのですが、「いたるところに・・・」と言われても、どこに、自分が死ぬのにふさわしい場所があるのでしょうか。

使徒パウロは、自分の死に場所をキリストの十字架に見いだしました。「古く自分に属するすべてを十字架につけました」「一、」自分の肉を、その『情』と『欲』と共に十字架につけました(ガラテヤ5:24)。「いま、生き残っているのは、もはや、わたしではなから。キリストが、わたしのうちを生きておられるのだからです(コリント1:10)

と告白しています。

信州松原湖の青年キャンプに参加した時のことです。講師が最後に、「みなさん。古い自分は、キリストと共に十字架につけられました。古い自分は、そこで死んだのです。『死んだ』『死んだ』『死んだ』と三回自分に言い聞かせなさい」「一、こうした強烈なお勧めをいただくました。いまどき、これほどの勧めを耳にすることはありません。しかし、わたしは、その勧めに深くうなずいて、「アーメン」「アーメン」と応えたのです。

しかし、集会が終わり、小海線に乗り、新宿駅に着き、都会の雑踏に紛れ込んでいるうちに、次第にメッキが剥がれて、以前の古い自分にもどりはじめていることに気づきました。松原湖キャンプにおける信仰体験は、結局、あれは、ただ、死んだぶり、死んだつもり、死んだ気になったにすぎなかったとおもわれて愕然としましたが、それでも、もしも・・・です、罪・咎・汚れから抜け出せないでいる「わたし」がらむとしても、キリストと共に十字架につけられたと信じ認めざるなら、好む「自己」を捨てる「こと」が出来得ぬことを、多くのキリスト

者は見いだしてきたのです。

でしょうか。

・キリストに「ついていくため」  
第二は、「自分の十字架を負い」です。「負う」といっても、キリストと同じ十字架を負えるはずがありません。「自分の十字架」とあります。「自分にだけ負わされた重荷」ともいえます。

「キリスト」を不動の北極星と見  
つめ、「聖書」を海図、「聖霊」を見  
えざる神の導きと確信して、多く  
の宣教師たちが、信仰により、「行  
く先を知らないで」出向いたので  
す。

横浜山手にある共立女子聖書学院  
の神学生であった「舟喜ルツさん」  
は、卒業して、すぐ結婚しました。  
しかし、最初に与えられたお子さ  
んが重いダウン症と診断されまし  
た。若い夫婦にとって、これはまさ  
に青天の霹靂です。わが子の行く  
末を案じられました。「わたした  
ち夫婦が負うべき十字架として、  
主から与えられたわが子です」と  
いう証をなさいました。若い夫婦  
には負い切れない重荷です。しか  
し、主イエスが共に背負っていて  
くださる「わが子」であると気づい  
た時、わが子を感じをもつて受け  
止めることができたというのです。  
・第三は、「キリストに従う」です。  
「信仰とは賭けである」と言った  
のは「パスカル」。「信仰とは、冒険・  
アドベンチャー」と言う人もいま  
す。未伝の地に出向いた宣教師な  
どは、さしずめ、大冒険家ではない

私の貧しい信仰の歩みにも、「行き  
先を知らないで」、踏み出した一歩  
がありました。正月元旦、一通のフ  
アックスが書斎に入りました。「結  
城牧師は、地方で伝道しているも  
のの苦しみがわからないのではな  
いか、いまさら裸になれないでし  
よう」という乱暴な内容でした。思  
いがけないことでした。誰だかわ  
かりません。それでも、不思議とそ  
れを主の示しと受け取りました。  
「ルームランナーの上を、いつま  
でも走っているようであってはな  
らない」と反省をせまられました。  
わが妻からは「あなた、賞味期限で  
す」と言われました。それを機会に、  
御言と聖霊とにゆだねて、見知ら  
ぬ地へと第一歩を踏み出す決心を  
いたしました。

「御心のままに」といって、自分を  
主に明け渡す、いえ、投げ出すこと  
ができたとしたら、そこからです  
ね……、メクルメクとまでは申

しませんが、ミズミズシイ信仰の切の口を見いだします。

「信仰の父」といわれた「アブラハム」は信仰者のモデル・原型といわれてきました。

へブル書11章8節には、「アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行くとのめしをこころもった時、それに従い、『行く先を知らないで』出て行った」（へブル11：8）のです。

「未知の世界」といえば、これから先の一年、世界に何が起き、どうなっているか、誰も定かでありません。未知の世界・不明の世界なのです。そうであっても、やはり、主イエスは「われに従え」と、わたしたちを促しておられます。

「服従の霊を与えて下さい」と、日々祈りもとめていなければ、なかなか従う気になれませんとは、わたしの先輩牧師の口癖でした。

いつまでも、ああだ・こうだと入理屈ばかり言うふうであれば、従う気など起こりません。何故なら、人間には、「不従順の霊」・「不信仰の霊」が充満しているからなのです。

ツベコベ言わず、無言のうちに服従した、あのアブラハムの信仰に習いたいものです。今年も、昨年に

まさって、自分を捨て、自分の十字架を負って、喜んで主にお従いするものでありたいと願います。

【祈ります】

父なる神さま、自分を捨てるなら眞の命をえると主は言われました。自分を捨て、自分の十字架を負い、主イエスに喜びお従いするものとならしめてくださいますように。主イエス・キリストの名により祈ります。「アーメン」。